

# 論文の内容の要旨

論文題目      ベルリン新教育の研究

氏 名      小 峰   総 一 郎

本論文は、ドイツのワイマール時代に都市ベルリン (=州と同格) において展開された新教育 (Reformpädagogik) を研究しようとするものである。

近年、ドイツならびにわが国において、ドイツの19世紀末葉から20世紀初頭にかけて展開された「新教育運動」が活発に研究されて来つつある。だが、従来の新教育研究においては、ワイマール時代のベルリンにおいて展開された新教育が、都市ベルリンの教育の世俗化、統一化、大衆化という大きな政治的ならびに文化的課題を自覚して推進、展開された新教育運動であるということが十分に捉えきれず、ために、その実践ならびに新教育推進の態勢も、孤立的、断片的に研究されるに留まっていたように思われる。

本研究は、ベルリンの新教育運動は1920年に成立した都市自治体「大ベルリン」がこの教育改革運動の与件となり、また推進者ともなったということに特に注目して、この都市自治体の下で展開された新教育実践を解明し、その構造ならびに実践相互の関係、ならびに新教育推進態勢のもった独自の意義を考察しようとするものである。本研究が「都市ベルリンの新教育」に注目するのは、次の理由からである。

- ①ベルリンの新教育は、プロイセン邦の中にありながら、その中で相対的に独自の権限と財政を備えた「都市自治体=大ベルリン市」の独自の教育改革運動であったということ、
- ②大ベルリン市教育行政においては、教育専門家行政が確立し、そこに議会多数派の社会民主党教育家を着任させ、彼らを通してベルリン教育の世俗化、統一化、大衆化を一定

程度実現させることができたということ、

- ③ベルリンには第一次大戦前から取り組まれた各種新教育の蓄積があり、それと共に、革命後ドイツ各地、とりわけハンブルクにおける新教育運動を踏まえ、ハンブルクの人と思想とを継受して、それをベルリンの教育課題と接合させながら新たな新教育実験に着手し、これを拡大、制度化させたということ、
- ④新教育の担い手として、ベルリンには教員集団、市民・労働者の連帯があったということ、また、新教育への医師や建築家の参加、芸術家ならびにキリスト教会の協力が見られ、さらに、市民レベルでの国際的な新教育支援態勢が存在したということ、

である。その意味で、ベルリンにおいては、ドイツの他の都市やラントでの新教育実践、さらには「田園教育舎」のような個人的教育実験と比して質量ともに格段に豊かな新教育実践が開されたと言えるのである。

本論文の構成と内容は以下の通りである。

(構成)

序章	ベルリン新教育研究の課題と方法
	第I部 端 緒
第一章	ベルリン新教育運動の胎動――中等教育の柔構造化――
第二章	ハンブルクの新教育運動から
	第II部 高 揚
第三章	ワイマール革命とベルリン教育改革
第四章	ベルリン新教育の展開 (一) 世俗学校・生活協同体学校
第五章	ベルリン新教育の展開 (二) フリッツ・カルゼンとギムナジウム教育改革
第六章	ベルリン新教育の展開 (三) 新教育運動の社会史
	第III部 転 回
第七章	ハンス・リヒャートとプロイセン中等学校改革
第八章	シャルフェンベルク島学校農園
第九章	学校田園寮について
	第IV部 帰 結
第十章	ベルリン新教育の達成と課題
結章	研究のまとめと今後の課題

(内容)

[第一部]

筆者は、新教育運動の最大のエッセンスは「子ども・青年の主体の発見」、「その能動性の育

成」にあると考えるのであるが、新教育運動においては、この新しい子ども把握に支えられて、学習・学校の間において、ここを若者の「生きる場」にすること、それが ①生活全体での自律の実現、②学習場面での〈学習への主体性・能動性〉の育成、に至るのであると考える。第一部においては、そのようなベルリン新教育の胎動が 19 世紀末からの中等教育システムの柔構造化にあったこと(第一章)、そしてハンブルクにおいては、「子どもから」の教育原理と「教師の教育の自由」を求める教育運動とが、「協同体学校」(Gemeinschaftsschule) という新しい学校像に結実していったことを明らかにした(第二章)。

## [第二部]

この新しい子ども把握は、ワイマール革命後のベルリンにおいては、教育の世俗化、統一化、大衆化というベルリンの教育制度改革と一体になりながら、彼らのこころと体の全体的な発達をはかる諸実践や態勢となっていた。筆者は、この新しい教育の制度的枠組である都市自治体「大ベルリン」の制度構造と教育改革目標を明らかにし(第三章)、その下で、特に教育の世俗化という目標を、子どもの自由な活動を創出する運動、また父母が参加し協同体学校を実現する運動として展開していった世俗学校、生活協同体学校の実践を究明した(第四章)。さらに、ベルリン南部ノイケルンにおいて、フリッツ・カルゼンが生活協同体学校原理による自由な教育を中等教育にまで拡大し、ドイツで初めて創設された上構学校 (Aufbauschule) を軸に展開した中等教育の新教育実践を明らかにし、また、ここにおいて初等教育と接続した総合制統一学校＝「ノイケルンの統一的学校体系」の内容と構造を解明したのである(第五章)。そして筆者は、このような新教育実践を実現する背景要因に迫るために「新教育運動の社会史」を究明しようとした。それは ①ベルリン南部、ノイケルンの社会構造の分析、②市民の文化的要求に対応した菜園学校、音楽運動の解明、③新教育を相互に結びつける団体、自主的教育組織、研究機関・情報センターの役割の考察、である。それらの検討を通して、この時代の新教育運動が一種の人的、政策的、思想的ネットワークで結ばれて個性的な展開を遂げていることが明らかとなった。これによって新教育運動は、単に学校、学級内での子ども中心の学習や活動というに留まらず、「菜園学校」や「学校田園寮」、また市民音楽活動や文化活動、生産活動とも連携をもった新しい文化・教育運動となったと言えるのである。

ベルリン新教育においては、新教育を実践する個人と団体、ならびに行政との関わりが強固であったことが認められる。新教育を担う人物が諸団体と緊密な連携を実現し、理論ならびに実践を蓄積して相互の連帯を実現し、このようなネットワークの中からまた新しい教育実践を作り出したと言えるのであった。そのような団体として筆者が特に注目したのが、「徹底的学校改革者同盟」、「ベルリン中央教育研究所」、「ディースターヴェーク大学」ならびに「世界新教育連盟」である。これら、新教育を推進し援助する地域的ならびに全ドイツ的、および国際的なネットワークの成立は、現代的な教育運動として注目されるのであり、本論文では、その個々の団体のありようとそれら相互の関係構造の究明も視野に入れたのである。

また、本論文においては、新教育を推進する行政の役割が特に注目された。ベルリンにおい

ては、1920年の「大ベルリン」制定により、強力な自治権を有した大ベルリンの教育行政当局が、財政窮迫の中、可能な限り、文化・教育・福祉に施策を講じていたのであった。これには、市議会で社会民主党(ならびに独立社会民主党)が多数を占め、その結果、大ベルリン教育行政に同党の教育民主化政策を推進する態勢が一定程度確立したことを見ておく必要がある。このような全体的状況の中から、新教育実験への財政措置や、「ディースターヴェーク大学」のような教員の継続教育機関の設立、さらには、市立学校田園寮の建設等の、ベルリンの児童生徒の健康増進ならびに社会福祉プログラムの推進が可能となったと言えるのである(第六章)。

### [第三部]

だが、ワイマール時代のドイツ・ベルリンは、第一次世界大戦敗北による莫大な賠償金を抱え、インフレと失業が慢性的であった。また、その中で根深い政治的対立も抱えていた。ベルリン新教育は、他面で、ここから来る「復古」要因も伴っていたのであり、教育合理化策、ならびに「ドイツ主義」運動とも常に隣り合わせであったとすることができる。筆者はそのことを、ドイツ人民党のハンス・リヒャートによる中等教育の授業論行政、ならびに「ドイツ高等学校」(Deutsche Oberschule)の創出・定着過程を通して究明した(第七章)。また、「シャルフェンベルク島学校農園」の中等学校新教育実践や「学校田園寮」の実践は、若者のこころと体を全体的に発展させる新教育の試みとして大いに注目されるのであるが、他方でこれらは、非人間的な現代文明を忌避して過度の自然崇拜、共同体、肉体崇拜に陥る可能性も無いわけではなかった(第八章、第九章)。

### [第四部]

ナチ台頭によってベルリン新教育運動は駆逐されたと言われるが、しかし、「ナチ第三帝国」(1933-1945)の間においても、治療教育、ユダヤ人教育、社会教育方面で、なお新教育の理論と実践が確実に存続継承されていた。新教育運動の駆逐過程を見ると、民主的志操、共和精神は駆逐され、肉体尊重や活動主義という「方法主義」的要素はナチ教育政策においても「継承」されている。新教育「後史」を考察することによって、新教育の軸に教育的価値としての人格性、共和精神が位置付いているということが逆に照射されるのである。

そして、このような新教育の精神が、戦後ベルリンの教育復興に導きとなった。それは、時代の状況に対応しながら、しかし児童生徒の学習への能動性を育てるという新教育の精神を核として、学校編成ならびに教育、教師のあり方を革新するものであったと言える(第十章)。

ワイマール時代ベルリンの新教育は、創意的な実践と子どもの科学研究とに基づいて、新しい学校・教養像の形成に挑んでいった。したがって、現代において、学校を子どもが<生きる>場所とし、彼らのこころと体の全体的な発達を実現して、能力と学校体系とを繋ぎ、社会に開かれた教育を作り出すことは、このベルリン新教育が現代教育学に投げかけた課題と言えるであろう。